



The Baseball Hall of Fame and Museum

公益財団法人 野球殿堂博物館

平成28年野球殿堂入り記者発表

館長 廣瀬 信一

休館日である1月18日(月)午後2時より、当館の殿堂ホールにおいて、平成28年の「野球殿堂入り」記者発表をマスコミと維持会員の皆様をお招きして行いました。競技者表彰・プレーヤー表彰では、巨人のエースとして活躍し、現在は巨人の二軍監督の斎藤 雅樹さん、西武、ダイエー、巨人などで通算224勝を挙げ、現在はソフトバンク監督の工藤 公康さんが選出されました。エキスパート表彰では大毎(現ロッテ)などで通算2314安打を放った故・榎本 喜八さんが3年ぶりの選出者となりました。特別表彰からは、終戦直後の野球復興に尽力した故・松本 瀧蔵さんと法政大のエースとして東京六大学最多記録の通算48勝をマークした山中 正竹さんが選出されました。

熊崎 勝彦理事長からの本年度野球殿堂入りの発表、挨拶に続き、永瀬 郷太郎代表幹事より競技者表彰委員会、また池田 哲雄特別表彰委員会議長より特別表彰委員会の選考過程について各々報告がありました。続いて、殿堂入り通知書の授与が行われ、顕彰者の挨拶が行われました。まずは、プレーヤー表彰の斎藤さんから「すばらしい先輩がおられる野球殿堂に入ることができ、大変驚きまた光栄に思っている」、また指導者として「野球の勉強をして、若い選手に歴史をしっかり伝えていきたい」、工藤さんは「先輩方がいらっしゃる中で、まさか自分がという思いがあった。ビックリしているし、名誉なこと」「自分の力だけで野球界を生きていくことはできない。育ててくれた監督、コーチ、家族を含め、みんなのお陰です。野球界に貢献していきたいし、多くの人に役立てるようにしたい」現役引退から44年目での殿堂入りとなった、エキスパート表彰の榎本さんのご長男、喜栄(よしひで)さんは「華やかなグラウンドでの姿とは別に、家では毎日のようにバットを振っている姿を見て、大変なんだなぁと思い、父を応援していた」と思い出を語りました。

特別表彰で選出された松本さんのご長男、満郎(まんろう)さんは「父が他界して57年。歴史の谷間に埋没しているところを発掘していただけた」と喜ばれ、山中さんは「大変光栄なこと。4年間を全うできて積み上げた数字は私の誇り」と感慨深げに話されました。

引き続き、ゲストスピーチに移り、斎藤さんが「あれだけのビッグゲームはなかなかない」と言った94年10月8日の中日との同率最終決戦で、救援して勝利投手になったときの投手コーチであった堀内 恒夫さんから、「右内転筋を痛めていたことは分かっていたが、少し多めに投げてもらった。180勝で終わってしまい、謝らないといけない」と明かされました。工藤さんには、西武時代のチームメイトであった東尾 修さんから「候補1年目で殿堂入りして、ソフトバンクでも1年目で日本一。何ともうらやましい思い。当時の西武の選手が殿堂入りするのは誇りに思う」、榎本さんについては、首位打者争いをした張本 勲さんが「理想的な打撃フォームです。余計な動きのない、教科書です」と絶賛されました。松本さんについては全日本野球協会の内藤 雅之さんから、堪能な英語を使い、GHQやその他のアメリカの関係者と交渉し、野球復興に尽力されたこと、アメリカンフットボールや水泳などの普及、国際交流にも貢献されたことなど数多くの功績が披露されました。山中さんについては大学時代の監督で恩師の松永 怜一さんが、「山中が神宮で学生最後のマウンドに上がった時、大歓声が起こり、こんなにうれしいことはないと思った」と当時を懐かしめました。

最後に、殿堂入りされた方々とゲストスピーカーなどを交えた記念撮影を行いました。

また昨年に引き続き、野球殿堂入りをされた皆様、熊崎理事長を始め関係者の方々にご出席をいただき、記者発表後の懇親会を東京ドームホテルで行いました。



後列左から 張本 勲氏、東尾 修氏、堀内 恒夫氏、内藤 雅之氏、松永 怜一氏
前列左から 榎本 喜栄(よしひで)氏、工藤 公康氏、斎藤 雅樹氏、熊崎理事長、松本 満郎(まんろう)氏、山中 正竹氏

※記者発表の動画が、当館ホームページでご覧になれますので、ぜひご覧下さい。

競技者表彰委員会

第56回競技者表彰委員会は、プレーヤー表彰でプロ野球記録の11試合連続完投勝利をマークし沢村栄治賞に3度輝いた斎藤 雅樹氏とプロ野球最長タイとなる実働29年で通算224勝を挙げた工藤 公康氏、エキスパート表彰で「安打製造機」の異名を取り通算2314安打を放った榎本 喜八氏の計3人を野球殿堂入りに選出した。

プレーヤー表彰は現役を引退して5年を経過し、かつ引退から21年未満の有資格者の中から幹事会が選んだ23人の候補者を対象に、15年以上の野球報道経験を持つ351人の委員のうち337人から最大7人連記の投票があった。投票総数1714。委員1人平均5.1人連記の投票でトップ当選したのは得票率84.6%にあたる285票を獲得した斎藤氏だった。



斎藤 雅樹氏

初めて候補になった2008年の14票から24、32、57、60、126、149と着実に票を伸ばし、前は246票。当選必要数にわずか3票及ばなかったが、今回は当選必要数を32票上回り、候補9年目での殿堂入りとなった。

「本当にびっくりしていますし、同時に大変光栄に思っています。これまで私に携わって頂いた全ての皆さんに感謝申し上げたい。そ

の中でも野球を始めるきっかけをくれた母に感謝したいです」

ソフトボールに夢中だった小学5年生のとき、川口市の市政だよりに掲載されたリトルリーグの選手募集に母・ユキ子さんが勝手に応募し「嫌々テストを受けた」という。それが野球殿堂への第一歩となった。

巨人入団後の転機は1年目の83年5月。遊撃手転向が検討される中、2軍の多摩川グラウンドを訪れた当時の1軍監督、藤田 元司氏に「ちょっと腕を下げてみろ」とアドバイスされた。腰の回転が横。オーバースローからサイドスローへの転向が遊撃手転向案を封じ込めた。

横手から140キロを超える速球と鋭いカーブで打者を翻弄する。年号が昭和から平成に代わった89年に大きく開花した「ミスター完投」はこの年から2年連続20勝を挙げて「平成の大エース」と呼ばれるようになる。

工藤氏は有効投票数の76.6%にあたる258票を獲得。1960年のヴィクトル・スタルヒン氏、94年の王 貞治氏、14年の野茂 英雄氏に次いで史上4人目となる候補初年度の殿堂入りとなった。

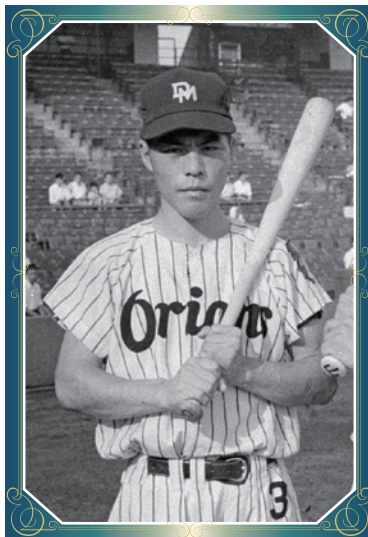
1年目の82年を皮切りとする14度の日本シリーズ出場は王氏と並ぶ最多記録。西武、ダイエー（現ソフトバンク）、巨人の3球団で日本一に貢献した「優勝請負人」左腕は発表の席に飾る写真にプロ野球人生をスタートさせた西武時代のものを選んだ。

「こうやって殿堂に選んで頂いたのは野球界に少なからず長くいたというのがあるのかなと思いますが、自分一人で生きてくることはできなかった。西武という強いチームで切磋琢磨できたことが自分を大きくしてくれたと思っています」

工藤氏がその背中を追いかけた当時のエース、東尾修氏がゲストスピーカーとして登壇。「公康は高校を出ていきなり日本シリーズに投げた。私は14年もかかったのに…。私も『おまえに負けるか、と負けん気をくすぐってもらった』とチームメイトが刺激し合う西武黄金時代の一端をのぞかせた。

エキスパート表彰は幹事会が選んだ13人の候補者を対象に、すでに殿堂入りしている人と競技者表彰委員会幹事、30年以上の野球報道経験を持つ計119人のうち112人から最大5人連記の投票があった。投票総数460。1人平均4.1人連記の投票で、榎本 喜八氏が有効投票数の75.5%にあたる83票を獲得して殿堂入りした。

早実から毎日（現ロッテ）に入団した1955年に開幕5番を打ち、新人王を獲得。何度も首位打者を争った張本 勲氏が「教科書のようなスイング」と評する安定した打撃フォームで通算2314安打を積み重ねた。



榎本 喜八氏

72年の西鉄（現西武）を最後に現役引退後はユニホームを着ることがなかったが、いつコーチの話が来てもいいように中野区の自宅から南千住にあったかつての本拠地・東京スタジアムまで走ってい

たという。

孤高の大打者は大腸がんのため12年に75歳で他界。亡き父に代わって通知書を受け取った長男の喜栄(よしひで)さんは「正当な評価をいただき、ありがたい気持ちで一杯です。一つのことをストイックに求める気質の強い人でした。不器用な面もあって理解されない葛藤も

あったと思う。他界した後で功績を評価して頂けたというのも、不器用な父らしくていいのではないかなと思います」と喜びを語った。

(競技者表彰委員会代表幹事 永瀬 郷太郎)

写真提供：ベースボールマガジン社

特別表彰委員会

野球殿堂に新たな歴史の1ページが記された瞬間だった。

2016年1月18日、午後2時から野球殿堂博物館内にある野球殿堂ホールにて、2016年野球殿堂入りを果たしたホール・オブ・フェイマーの記者発表が行われた。

競技者表彰委員会プレーヤー表彰選出が決定した斎藤雅樹氏(巨人二軍監督)と、工藤 公康氏(ソフトバンク監督)、エキスパート表彰選出で、晴れて殿堂入りの荣誉に輝いた故・榎本 喜八氏(元毎日)の3名に続き、特別表彰委員会によって選出された故・松本 瀧蔵氏と、山中 正竹氏の2名の名前が読み上げられた。



松本 瀧蔵氏

松本氏は、1901年3月20日生まれ。幼少期に家族でアメリカへ渡り、帰国後には広陵中学に編入し、卒業後には明大へ。明大在学中の29年、野球部マネージャーとして、同部の世界一周遠征に参加。卒業後は明大教授として母校で教鞭をとる。36年にはベルリン五輪に調査員兼外国関係主事として参加。世界の檜舞台を直に体験する。戦後は衆議院議員に身

を転じて、外務政務次官、官房副長官を歴任。明大理事、日本体育協会理事なども務めたキャリアを持つ。

49年、サンフランシスコ・シールズが来日した際には、シールズ親善野球委員会の日本側実行委員長を務め、戦後初の日米野球開催に貢献。55年からは日本社会人野球協会副会長を務めた。

得意の英語力を生かして、GHQと掛け合い、戦後初のアメリカプロ野球チームの来日、選抜高校野球大会の復活など、野球の復興に多大なる貢献を示した。58年11月2日没。

山中氏は、1947年4月24日生まれ。66年法大に入学すると、1年春から頭角を現す。「法大三羽ガラス」と謳われた、1年先輩の山本 浩二氏(後に広島)、田淵 幸一氏(後に阪神一西武)、富田 勝氏(後に南海—巨人—日本ハム)らと共に、法大黄金時代を築く大きな原動力となった。サウス

ポーからの制球力抜群の投球は、「小さな大投手」と称賛された。在学時に残した通算48勝(13敗)は、現在でも、東京六大学リーグの歴代最多記録だ。

法大卒業後は、住友金属へ進み、エースとして補強選手も含めて70年から75年まで6年連続都市対抗野球大会に出場。社会人屈指の好投手だった。

現役引退後には、住友金属で監督を務めて、82年には第53回都市対抗野球大会に優勝した。さらに83年、84年には2年連続社会人野球日本選手権を制覇するなど、アマチュア球界の名将としても評価を高めた。

88年のソウル五輪では、投手コーチとして、日本代表の銀メダル獲得に貢献。92年、野球が正式種目となったバルセロナ五輪では、日本代表監督として、銅メダルを獲得している。

法大監督となった、94年から2002年には、リーグ優勝を7回達成。95年には、全日本大学野球選手権大会に優勝するなど、指導者としても、母校・法大の黄金時代を築いた。

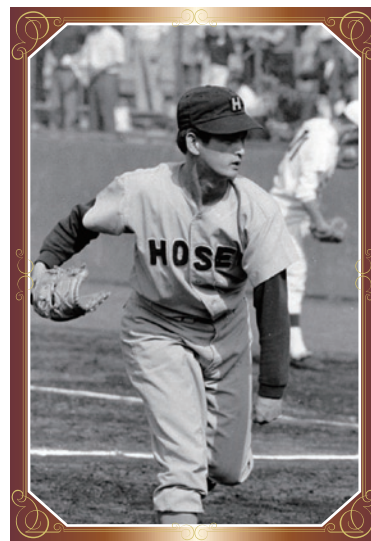
記者発表に先駆けて、本年1月12日午後2時から、東京ドームホテルで特別表彰委員会選出を決める特別表彰委員会が開催された。

10人に絞り込まれた候補者の中から、投票は各選考委員3名連記の規程の下、14人の選考委員による投票が行われた(その中で委任状1名)。

その結果、殿堂入りの規程となる75%の票を集めた候補者は、先に挙げた松本氏(13票)と、山中氏(12票)の2名だった。

歴史の中に名を刻む、まさにレジェンドと呼ぶに相応しい野球殿堂入り表彰者だが、本年度で特別表彰委員会選出103名と、競技者表彰委員会選出89名を加えて、伝説を紡いだ男たちは、計192名を数えることになった。

(特別表彰委員会議長 池田 哲雄)



山中 正竹氏

写真提供：ベースボール・マガジン社

📖 こんにちは図書室です 📖

日本職業野球連盟創立80周年



大隈総裁のあいさつ

今年には日本職業野球連盟（現在の日本野球機構）の創立から80周年となります。80年前の1936（昭和11）年2月5日に東京巨人、大阪タイガース、名古屋、東京セネターズ、阪急、大東京、名古屋金鯱の7チームの代表者が集まり、創立総会が開催されました。

『日本職業野球連盟公報第1号』によれば、日本職業野球連盟創立総会は東京・丸の内の日本工業倶楽部で、7チームから計34人が出席して行われ、連盟総裁に大隈 信常氏、大隈氏の指名により副総裁に安藤 信昭氏、松方 正雄氏（1986年殿堂入り）が就任し、正式に連盟創立となり、その後別室へ移動し、「日本球界の大先輩、六大学連盟の首脳

者並びに都下新聞通信社の運動部諸氏を招待し」創立披露宴が行なわれたことが紹介されています。主な招待者は泉谷 祐勝氏、櫻井 弥一郎氏（60年殿堂入り）、島田 善介氏（69年殿堂入り）、平沼 亮三氏（79年殿堂入り）、松本 瀧蔵氏（2016年殿堂入り）、太田 茂氏（72年殿堂入り）ら、当時の野球界の主要なメンバーでした。

主な披露宴出席者

名前	所属	殿堂入り	名前	所属	殿堂入り
泉谷 祐勝	稲門倶楽部		銭村 辰己	駿台野球倶楽部	
岩本 勇次郎	明治大学野球部部長		平沼 亮三	東京大学野球連盟会長	1979
大島 正一	早稲田大学幹事		松井 清吉	警視庁興行係長	
国塩 耕一郎	警視庁保安課長		松本 瀧蔵	東京大学野球連盟規則委員	2016
久保田 正次	立教野球部長		松本 富三	東鉄野球部マネジャー	
久保田 義久	東鉄野球部マネジャー		松内 則三	東京中央放送局アナウンサー	
澤 東洋男	審判		中野 五郎	稲門倶楽部	
櫻井 弥一郎	三田倶楽部	1960	太田 茂	記者倶楽部	1972
島田 善介	三田倶楽部	1969			



昭和初期の2階大会堂（日本工業倶楽部所蔵）

当時の読売新聞には、披露宴で大隈総裁から「連盟の統制と各チームの技術的進歩が理想通り行けばわれわれは近き将来において必ず米国との間に世界の争覇戦を行い得ると確信するものである」と挨拶があり、招待者の平沼氏、櫻井氏、泉谷氏、太田氏から挨拶の後、最後に平沼氏の発声で、「連盟万歳」を三唱して閉会と書かれています。

創立総会が行われた日本工業倶楽部は1917（大正6）年に実業家らにより「工業家が力を合わせて、わが国の工業を発展させる」ことを目的として創立され、現在も一般社団法人として活動しています。会場となった日本工業倶楽部会館は改修されていますが、当時の外観は残されて、今も同じ場所に建っています。

会館のどの場所で創立総会と披露宴が行われたのかは、大日本東京野球倶楽部の社員として出席していた野口 務氏が『巨人軍二十年史』の中で、創立総会の場所は2階の会議室で、披露宴は大食堂と述べており、日本工業倶楽部にお聞きしたところ、創立総会の場所は現在は大会堂となり、披露宴の場所は3階中ホールになっているそうです。

※『日本職業野球連盟公報第1号』は当館HP図書室のページのデジタルアーカイブで公開しています。

『巨人軍二十年史』は図書室でご覧いただけます。



現在の日本工業倶楽部（千代田区丸の内1丁目）

司書 茅根 拓

殿堂入りの人々を語る(50)

私のヒーロー♡父・松木 謙治郎

濱田 “Peco” 美和子 (1978年野球殿堂入り 松木 謙治郎氏長女)



1978年 野球殿堂入り
松木 謙治郎氏レリーフ

シンガーソングライターと振付師をしております濱田 “Peco” 美和子です。2011年には「マルマル・モリモリ」のマルモリダンス、2013年には東京国体のイメージソング楽曲提供とゆりーとダンスなど作らせていただきました。

Peco というあだ名は赤ちゃんの時に舌を出すくせがあったところから、父が私を「ぺこ」と呼んだのがそのまま私の芸名にもなりました。

私が3歳の時、両親は私にピアノ・クラシックバレエ・タップダンスを習わせてくれました。父は幼い私を膝に抱いてはよく「ふるさと」を歌い、

ハーモニカを吹いてくれました。

いつのまにか私も歌・音楽が大好きになり、ピアノを弾いては曲を作って歌うようになりました。

父は、音楽と踊りは人がモノを伝える原点だと私に教えてくれました。とても照れ屋だった私には、本当にこのふたつが私の気持ちを伝えられる手段となりました。

野球は一生を通して父のすべてだったと思いますが、趣味も入り込むと誰もそこに立ち入れないくらいでした。墨絵、革工芸 etc... でもどれも自分の流行が終わると何もなかったように作品もどこかに消えていました。でもやはり音楽は好きだったのか民謡歌唱はずうっとひとり部屋に籠って歌っていました。しかし父が亡くなった後、母から、あの毎日の練習は私の結婚式で歌うためだったと聞かされました。残念ながら父が生きているうちには叶わなかったこととなりましたが。

お酒はよく飲んでいました！うちに配達に来る酒屋さんが必ず伝票を見ながらこんなに払っていただき... と言っていたくらいですから。野球界でも酒豪伝説は残っているようですが。

朝のウイスキーから始まり、日本酒、夜中に起きた時のための白ワインは冷蔵庫に冷やしてあり、ビールはお酒じゃないと、ビールにウイスキーを入れて大人になった私にも勧めてくれたこともありました。

本当に豪快な父でしたが、今私が演出の仕事をもしていることで気付いたことがあります... 決してお酒がすごく好きだということでもなかったのでは？と。たくさんの選手を指導し、采配をふるうということはとても責任の重い仕事です。私は父のように勝負がかかってはいたのですが、それでも公演を成功させるために心身追いつめてしまうことがあります。そんな時私もお酒を飲んで気持ちを和らげることがあり、ふと父もこんなだったのかなと思ったのです。父が亡くなったのは私が27歳の時でした。大きなツアーのサポートミュージシャンとして全国ツアーの真っ最中、クリスマスイブの夜に父は倒れました。沖縄戦争の最前線からも生き残り、どんな時も厳しく強く大きな父が、ツアー先から戻ると病院のベッドでたくさんのチューブに繋がれてました。その後、大きな手術を終え麻酔が切れたその途端、私たち家族を見てにやりと笑うと「悪党死なずやな！」やっぱり強かった！父は本当に私のあこがれのヒーローとなりました。小さな頃から偉大すぎて、厳しくもあり、こわくてうまく父と話せなかった私は今、仕事や日々のいろいろを心の中の父に問いかけ、前に進めている気がします。父は幼い頃、家が貧しくたくさんの苦勞をしてきたことから、家族にはいい環境をと。そして私に音楽とダンスを与えてくれました。結果、今それを生業として、私が歌って踊って笑顔になることをみなさんに伝えていけること、それこそが父が私に残してくれた最高の宝物です。亡くなった人のことは生きている私たちが伝えることしかできません。この度こういう機会をいただきました野球殿堂博物館の館長さまにあらためてお礼申し上げますと共に、さらにたくさんの素敵なお話をここに掲載していただけるようお願い申し上げます。そして読んで下さったみなさまに感謝いたします。

野球殿堂博物館 トピックス (2015年11月~2016年1月)

11/12(木) 高山 俊選手(明大) 来館



10月10日(土)の東京六大学 秋季リーグ戦の東大対明大1回戦で、同リーグ最多となる通算128安打を打ち、新記録を達成した高山 俊選手が、善波 達也明大監督と来館され、廣瀬館長から感謝状を贈呈しました。高山選手からは新記録達成時使用バットと達成球をご寄贈いただいております。記録達成翌日より展示しています。

11/14(土) プレミア12 特別展示



11月8日(日)の開幕戦「日本対韓国」で、侍ジャパン・大谷 翔平投手が投じた記念すべき大会第1球、同試合で使用された三塁ベースの展示に加え、大会の優勝トロフィーを大会主催者より借用し、館内エントランスホールで展示しました。

11/19(木) パドレスご一行来館!

大リーグのサンディエゴ・パドレスのマーク・ロレッタGM特別補佐、ブランドン・マウアー投手、コリン・リー投手らご一行が来館し、館内の展示を見学しました。



11/22(日) 権藤 博氏来館

中日ドラゴンズOBで元横浜監督の権藤 博氏が雑誌の取材で来館しました。その際、現在もNPB新人最多記録である1961年の35勝ウイニングボールと、翌62年の30勝ウイニングボールをご寄贈いただきました。



11/25(木) 秋山 翔吾選手(西武) 来館



プロ野球シーズン最多安打216安打のプロ野球新記録を達成した埼玉西武ライオンズの秋山 翔吾選手が来館されました。秋山選手より、シーズン最多安打のボールと記録達成時に使用されていたバット、ユニホーム、バッティンググローブをご寄贈いただき、廣瀬館長から、感謝状を贈呈しました。

11/22(日) 読売ジャイアンツ新入団選手が来館!

読売ジャイアンツの新入団選手が来館し、桜井 俊貴投手(立命館大)ら15名の選手たちは、館外にある戦没プロ野球人のお名前が刻まれた「鎮魂の碑」や、プロ野球の歴史を紹介する展示、野球殿堂ホールなどを見学されました。



12/26(土) 西郷 泰之選手(Honda) 着用ユニホーム、使用バット展示



11月に引退を発表した社会人野球Hondaの西郷 泰之選手より、着用ユニホームと使用バットをご寄贈いただきました。12月26日より常設展示「社会人野球」コーナーに展示しています。

12/15(火) 広野 功氏来館

中日、巨人等で活躍された広野 功氏が来館され、巨人時代に代打逆転満塁サヨナラ本塁打を放った時に使用されていたバットをご寄贈いただきました。広野氏は中日入団年の66年にも逆転満塁サヨナラ本塁打を達成しており、2度の達成は史上唯一の記録です。



1/8(金)「日本野球ポスター2015総選挙」結果発表

2015年11月17日より企画展「日本野球ポスター展2015」の開催と同時にスタートした「日本野球ポスター2015総選挙」は、2016年1月7日に投票を締め切りました。期間中、3,125名のお客様にご投票いただきました。結果、345票を集めた「東京六大学野球春季リーグ戦早慶戦ポスター チアリーダーバージョン(慶大応援指導部、早大応援部)」が第1位となりました。当館ホームページでは、計74点の中から選ばれた、上位10点のポスターを紹介しています。



1/12(火) プロ野球新人選手119名来館

「2016年NPB新人選手研修会」に先立ち、新人選手と審判員ら計119名が来館しました。選手たちは、戦没プロ野球人の名前が刻まれた「鎮魂の碑」、プロ野球の歴史に関する展示、野球殿堂ホール、それぞれの球団ゆかりの資料などを、40分ほどかけて見学しました。



1/26(火) 企画展「野球報道写真展2015」山本 昌氏来館

会期初日にテープカットセレモニーを開催しました。2015年で引退した山本 昌氏にご来館いただき、テープカットを実施しました。また、ご本人の最終登板の写真パネルにサインをいただきました。



本展は当博物館と東京写真記者協会の共催による初の試みで、同協会加盟各社のカメラマンが撮影した写真68枚を展示し、2015年の野球界を振り返る内容です。2月28日(日)までの開催となります。ぜひご覧下さい。

【写真左】
東京写真記者協会藤田 尚人常任幹事、山本 昌氏、廣瀬館長



博物館からのお知らせ

▶退職

当館の開館以来、57年にわたり外国文書を担当しておりました鈴木 龍一が12月31日付で退職いたしました。

▶販売中

●野球守 2016

価格 800円(税込)

ご好評いただいております「野球守」が、2016年版として新しくなりました。みなさまの野球を応援する御守りです。2016年もご購入頂きますようお願いいたします。



※なお、2015年の「野球守」につきまして、博物館にて返納箱を用意いたしております。

●古田 敦也氏 直筆サイン入りフォトスタンド(シリアルナンバー入り)

価格 21,600円(税込)

2015年野球殿堂入り記念として、古田敦也氏直筆サイン入りの写真をフォトスタンドに入れて販売中!

(写真のサイズ-2L)

(シリアルナンバー入り)

郵送ご希望の方は、商品価格+500円(送料)を野球殿堂博物館まで、現金書留にてお送り下さい。



博物館のご案内	場 所	東京ドーム21ゲート右
	開館時間	3月1日～9月30日 AM10時～PM6時 10月1日～2月末日 AM10時～PM5時 (入館は閉館の30分前まで)
	入館料	大人 600円(500円) } ()は 高・大学生 400円 } 20名以上の団体 小・中学生 200円(150円) 65歳以上 400円
	休館日	月曜日(祝日、東京ドームでの野球開催日、春・夏休み中は開館) 年末・年始(12月29日～1月1日)
	《2月・3月・4月の休館日》	2月 1日・8日・15日・22日・29日 3月 1日～14日(予定) 4月 11日・18日・25日

※東京ドームのメンテナンス工事に伴い、2月29日(月)から3月14日(日)(予定)まで臨時休館いたしますので、ご了承ください。
※3月から閉館時間が18時(入館は17時30分まで)となります。

●編集後記 1月18日に行われた野球殿堂入り記者発表の速報をお届けするため、ニュースレターの発行が遅くなりました。紙面の都合により「コラム 博覧/博楽」「知ってほしいこんな資料」は休載します。

野球殿堂博物館 Newsletter 第25巻 第4号
2016年2月5日発行(年4回発行)
編集・発行 公益財団法人 野球殿堂博物館
(旧・財団法人 野球体育博物館)
〒112-0004 東京都文京区後楽1-3-61
Tel 03(3811)3600 Fax 03(3811)5369
http://www.baseball-museum.or.jp/



The Baseball Hall of Fame and Museum

公益財団法人 野球殿堂博物館

リレー随筆(62)

故・高山 典久さんから教えられたこと

競技者表彰委員会幹事 富坂 和男 (日本放送協会)

昨年10月14日、元NHKの野球実況アナウンサー・高山 典久さんが逝去されました。享年75歳。高山さんは昭和38(1963)年にNHKに入局し、東京、大阪、名古屋、広島などに勤務。プロ野球や高校野球を中心に長年スポーツ放送の第一線で活躍され、平成8(1996)年夏の甲子園決勝・松山商-熊本工戦の「奇跡のバックホーム」など数多くの名場面を実況されました。

私にとって高山さんは、スポーツ実況の師とも言うべき方でした。深いお付き合いをさせていただくようになったのは、私が入局6年目の平成7(1995)年夏、大津局に異動してからです。当時、高山さんは関西の拠点である大阪局のベテランチーフアナウンサー。まだこの馬の骨とも分からぬ若造を、厳しく熱く鍛えてくださいました。初めて現場でご一緒したのは、兵庫県明石市での全国高校軟式野球選手権のラジオ中継。ただたどしい私の実況を隣でサポートしてくださいましたが、放送後に待っていたのは、「君は何も分かっていない!」という一喝でした。

そこから定年までの数年間は、ひたすら厳しく指導される日々でした。褒められた記憶はありません。ある時は球場で、ある時は局内の廊下で、またある時は居酒屋で、声を荒らげて叱責されることもしばしばでした。初めは私も深く悩み、正直顔も見たくないと思ったものでした。ところが不思議なもので、それが続くうちに、いつしかすっかり高山さんの考え方に感化され、「高山色」に染まっていく自分がいました。

高山さんの指導は、表現や発声などアナウンスメントに関することはほとんどありません。実況者として野球にどう向き合うか、その姿勢や考え方ばかりでした。

まず取材からして独特でした。例えば球場で選手やコーチにお話しを伺う際、社名を名乗りません。「高山と言いますが、この前のあの一球はどういう意図で?」と、いきなり切り込んでいきます。「社名に頼るな。どこの誰だか分からないが、いつもグラウンドに居て、時折鋭い質問をしてくる人になれ」というお考えでした。あと常々、「今日の放送に使うための話など聞くな。放送で使えなくても、野球の本質に迫る話を聞くのが取材だ」とも。野球観を磨くための取材を徹底されていました。そのほか「君の放送のために今日の試合があるわけじゃない。真摯に向き合え」「本物を見ろ。それを見極める目を持って」などなど…グラウンド内外で教えられたことを挙げればきりがありません。

高山さんはまた、型にはまることを嫌う方でもありました。取材や準備の仕方も、その時々で最良のものを探るべきだというお考えでした。正しい意味ではないのかもしれませんが、口癖は「無手勝流」。いつも柔らかく自由な発想で、真実を追い求めていました。そしてその姿勢を、定年を迎えるその日まで貫き通されました。

多くの貴重な教えを受けながら、残念なことに今の私には、ほとんど実行できているものはありません。明石の球場で受けた最初の一喝は、まさに真実でした。ここまで書いてきても、高山さんに褒められた記憶は出てきません。

ただ、実は一度だけ、それらしきことを言われたことがあります。定年の直前でした。

「君の放送を初めて聞いた明石の軟式野球、あの実況は素晴らしかった。あれを超える実況を、今の君はできていない。あの時のひたむきさを忘れないように。」

今思えば、最高のお褒めだったのかもしれませんが。定年を境に一切マイクに向かうことはなかった高山 典久さん。これもまた高山さんらしい引き際でした。どうか天国でも、私たち後輩の放送を見守り、時には叱咤してください。心より、ご冥福をお祈りいたします。

*なお、葬儀は近親者のみで執り行われ、墓所の公表も控えられています。